

第 17 回日本在宅医学会もりおか大会 一般・指定演題

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅で看取られた末期癌患者の訪問リハのニーズについて
演者名	佐藤深雪、岩村和幸、平林大輔、及川裕之、中田隆文
所属	須藤内科クリニック リハビリテーション科

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5
【背景】当院は末期癌患者の訪問リハを実施しており、リハに対するニーズについて調査、報告してきた。末期癌患者の看取りは緩和病棟などの専門的な施設以外に在宅でも行われている。末期癌で在宅看取り患者への訪問リハの具体的な対象、介入時期、期間、方法などは確立されておらず、データの集積や研究が必要である。 【目的】在宅で看取られた末期癌患者が訪問リハを希望するニーズとニーズの変化について調査し、その傾向を明らかにする。 【方法】平成 23 年 1 月より平成 26 年 9 月までに当院より訪問リハを実施し、在宅で看取られた末期癌患者 31 例について、訪問リハ記録より後方視的に調査した。本研究は当院の倫理審査にて承認されている。 【結果】ニーズは呼吸器症状の緩和、身体の自覚症状の緩和、身体機能の維持と獲得、移動能力の維持と獲得、ADL の維持と獲得、摂食の継続であった。経過中、14 例(45%)でニーズの変化を認めた。26 例で看取り直前まで訪問リハを希望していた。訪問リハに対するニーズがなくなり、訪問リハ終了となったのは 5 例であった。 【考察】訪問リハのニーズは病状の進行に伴い、身体機能や ADL の維持と獲得から自覚症状の緩和に移行する事例が多かった。状態の変化に応じて適切な評価を行い、患者の訴え(希望)に寄り添い、訪問リハの計画を修正することが必要であった。予測困難な状態の変化もあり、訪問リハでも末期癌患者の症状や看取りの経過について学習する必要がある。直接的なアプローチだけでなく、患者やその家族の精神不安や介護不安に対するサポートも重要と思われる。 【COI】特になし。		